

## 自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象

大 浜 るい子 (広 島 大 学)  
鈴 木 雅 恵 (広島大学大学院)  
多 田 美有紀 (三重大学非常勤講師)

### 0. はじめに

スピーチレベルシフトとは、敬語の使用・不使用、文末文体の丁寧体・普通体の使い分け、あるいは美化語の使用・不使用など、対話相手や場面、話題などによって表現スタイルを変えることを言う。敬語レベルのシフト(生田・井出 1983)、待遇レベルシフト(三牧 1993)と呼ばれることもある。スピーチレベルシフトには、以下の3要因が関わっていると考えられており、そしてそれらの間には優先順序があると言う(生田・井出 1983, 若い番号ほど優先)。

- 1) 社会的コンテクスト(年齢, 性別, 親疎, 社会的上下関係, 学歴, 場面など)
- 2) 話者の心的距離
- 3) 談話ユニットの展開

この要因のうち、話者の心的距離、談話ユニットの展開を会話内の要因(宇佐美 1995, 参照)とすれば、社会的コンテクストは会話の外の要因である。前者が、会話内で刻々作用し、そのたびにスピーチレベルシフトが起こりうるのに対し、後者は会話が始まる前に働く要因で、いわば会話全体の基本的なスピーチレベルを決定する。社会的コンテクストとスピーチレベルの関係については社会言語学において既に多大な研究成果があがっているが、会話内の要因、特に談話の展開構造がどのようにスピーチレベルシフトに関わっているかということについては、研究が始まったばかりである。

本研究は、一定期間連続して行われた同一人物間の談話を時間の経緯と共に観察し、会話内の2つの要因とスピーチレベルシフトの関係を明らかにすることを目的としている。

### 1 資料の概要

本研究で分析する資料は、3人の大学生(以下、K, S, Mと略記号で表す)による6回分、計4時間27分分の談話である。談話参加者K, Mは共に女性で23才の大学院生、互いをよく知る友人同士である。Sは男性、25才、大学生である。K, MとSは1回目の談話日には初対面であり、またそれ以降も定められた談話

日以外に互いに会うことはなかった。3人には週1回約一時間、あらかじめ決められたテーマに関して自由に話をしてもらい、その談話風景をビデオに収録した。談話収録場所は東広島市、収録時期は1995年5月から7月である。各回のテーマは「自己紹介」「休日の過ごし方」「専攻分野」「夏休みの思い出」「就職」「好みのタイプ」であった。

### 2 本研究の方法

本研究はこれまでの先行研究と以下の点で異なる。まず、分析資料として談話全体を対象としていることである。これまでの研究は談話の一部を孤立的に扱ったものがほとんどであり、スピーチレベルシフトと要因間の結びつけにアドホックな印象がつきまわっていた。本研究は談話の開始から終了までの全体を視野に入れ、談話中のスピーチレベルシフトをすべて拾い上げることにより、議論の信頼性を高めた。さらに同一人物による談話を一定期間連続して観察することにより、スピーチレベルシフトと要因間の関係づけを強化した。

次にあげなければならないのは、スピーチレベルに関して従来のものとは異なる分類を提案したことである。3で詳細に述べるが、これまでの研究では丁寧体(敬語表現, 美化語を含む)は細分化され、いくつものレベルが設定されるのに対し、丁寧体以外のはすべて普通体と一括りにされてきた。そのためスピーチレベルシフトそのものの同定に問題があった。本研究ではこれまで普通体に分類されてきたものを親体、ゼロ体、独白体という3つのスピーチレベルに区別した。この区別を導入したことで、これまで特に談話機能とスピーチレベルシフトの関係が循環論になっていたのを回避することができたと考えている。

先に述べたように、本資料は同一人物間の談話なので、スピーチレベルシフトに関わる社会的コンテクスト要因の多くは固定している。よって、この談話資料の中のシフト現象には年齢, 性別, 上下関係, 学歴, 場面などによるものはなく、あるとすれば、親疎の要因、あるいは対話者間の心的距離、そして談話構造に関わるものということになる。調査1では、前2者に

ついて見ていく。親疎については、初回と2回目以降のスピーチレベルを比較する。対話者間の心的距離については、2回目以降の談話間で比較する。談話構造に関しては調査2で取り上げる。

ところで先に、筆者達は、本資料において方言と共通語がどのように使い分けられているかを調査した(多田・犬飼・大浜 1996)。KとSがともに広島方言話者であったことから、談話内には多くの広島方言が現れたが、その使用頻度や傾向に関して興味深いことが観察された。すなわち、①初回と2回目以降では方言使用比率に大きな差が見られたこと、②知り合ってから時間経過に比例して方言使用が増加したこと、但しそれは③直線的な増加ではなく、大きかった使用頻度差の振幅が徐々に小さくなり、使用が安定していくという形で実現されることが明らかになったことである。その際多田・犬飼・大浜(1996)は、これらの結果をそれぞれ、親疎要因による現象、親疎要因と心的距離要因が引き起こした現象、そして不安定な心的距離が安定していく様と解釈した。

方言と共通語の使い分けとここで問題にするスピーチレベルシフトとは必ずしも同じではないが、敬語の使用不使用、丁寧体と普通体の使い分けで代表されるスピーチレベルシフトには、今やスタイルの違いとも言える共通語と方言の使い分けと、同様の基準が適用される側面があると思われる。よって、本研究では、多田・犬飼・大浜(1996)にならい、各談話を5分刻みに分割し、スピーチレベルシフトをマイクロで観察すると同時に、接触回数に応じて変化するシフトを談話間の比較によってマクロで観察する。

### 3 スピーチレベルの分類基準

#### 3-1 先行研究におけるスピーチレベル

スピーチレベルとして何を設定するかというのは、研究者によって異なる(表1参照)。共通するのは、敬語表現を含むレベルと含まないレベルが区別されていることである。敬語表現を含むレベルについては、場合によってさらに下位分類されているが、先行研究ではどちらかと言えば敬語表現に焦点

がおかれていたようで、敬語表現を含まないものは、まさに「含まない」その他の扱いであった。しかし、仁田(1991)が指摘するように、「丁寧さ」は言表態度を表す文法カテゴリであり、聞き手の存在を前提として存在するもの、つまり聞き手不在の発話においては分化・存在し得ないものである。よって「文が外」<sup>1)</sup>として発話されていようとも、それが聞き手を目指さない「聞き手不在発話」である場合、「丁寧さ」といった文法カテゴリの発現が抑えられる」(p.71)と考えられている。つまり聞き手が意識の上で不在である発話(独白・自問など)においては、「丁寧さ」は現れ得ず、「です・ます」を使い得ないのである。

しかし、これまで敬語表現を含まないレベルとして一つにまとめられてきたものの中には、聞き手存在発話として丁寧体と対立する常体・普通体と、聞き手不在発話あるいはそれを装うものとしての常体・普通体が混在していたと言える。スピーチレベルシフトが対話者間の社会的、心理的關係と関わるものであるとの前提で議論が展開される中で、聞き手の存在・不在が考慮に入れられない分類基準は、適切なものとは思われない。よって、われわれは聞き手存在発話形式で丁寧体と対立するものを親体とし、聞き手不在発話形式として独白体とゼロ体を区別する。以下、本研究で設定したスピーチレベルについて説明する。

#### 3-2 本研究におけるスピーチレベル

基本的には発話の文末形式で区別する。

敬体：

敬語表現を含むレベルに関しては、我々の資料が学生間の会話で敬語表現が極端に少なく、また「ごさいます」や「であります」「わたくし」などのより高いレベルの敬語表現が皆無であったので、「です・ます体」とそれに終助詞「よ」「ね」などを付加したものを一括して、敬体レベルとして設定した。

親体：

・終助詞を含むもの。終助詞「よ」「ね」「さ」「わ

表1 先行研究に見られるスピーチレベル比較

先行研究	スピーチレベル	敬語表現を含むレベル		敬語表現を含まないレベル
生田・井出(1983)	+	尊敬語・謙讓語・丁寧語が存在するもの		0 尊敬語・謙讓語・丁寧語が存在しないもの
三牧(1993)	+	です・ます体、ごさいます体、であります体	+	0 だ体
宇佐美(1995)	+	尊敬語・謙讓語・美化語や「わたくし」「ごさいます」などあらたまり度の高い発話	0	- 丁寧体を含む発話や質問に対する簡略すぎる答えなどあらたまり度の低い発話

「ぞ」「ぜ」「な」などはもともと話し言葉のみ現れるもので、基本的に聞き手の存在が前提にされているものである。陳(1987)でも、これらの終助詞の機能は、話し手と聞き手の認識のギャップをうめるものと位置づけられ、聞き手の存在が明記されている。ただ「な」は「聞き手不在で使われることもあり独り言的要素が強い」とされているので、我々も「な」を親体ではなく、独白体に分類した。

- ・「の(だ)」を含むもの。野田(1997)によると、「の(だ)」には対事的なムードと对人的なムードをもつものがあるが、「対事的「の(だ)」は、「の」「んです」といった形をとりにくく、そこから「の」「んです」は「聞き手が存在するときに、その聞き手を意識して選ばれる形である」(p.68)とされている。また、「のだ」の形は、対事的である場合には「～と思う」を後接できると述べていることから、本研究では「～と思う」を後接できない「のだ」と「の」という形式を親体に含めることとする。ちなみに「んです」は敬体に含む。

#### 独白体：

独白体には、「場面によっては問かけ文にもなりうるが、基本的には『不定自問』である「かな」「かしら」と、同じく独白的状況で用いられる「だろうか」(カノックワン(1996))を含めた。

#### ゼロ体：

上記の敬体、親体、独白体に含まれなかったものをゼロ体とした。具体的には、名詞(格助詞が付加されたものも含む)のみ、形容詞のみ、副詞のみで終わるもの、また動詞の終止形、連用形で終わるもの、さらにそれらに「から」「ので」「けど」などの接続助詞を伴ういわゆる言いさし表現をこのスピーチレベルに含めた。

## 4 調査1の結果と考察

図1は、談話日ごとに使用されたスピーチレベルを個人別にまとめたものである。ここから以下のことが見て取れる(図1参照)。

- 1) 常時一定量の使用があると思われるスピーチレベルと使用が限定されているスピーチレベルがあり、前者にはゼロ体と独白体が、後者には敬体と親体が属する。
- 2) 敬体と親体は初対面と2回目以降で使用が分かれた。
- 3) 親体は2回目以降増加傾向にあり、心的距離が近くなるにつれ使用が多くなると思われる。

4) ゼロ体と独白体の使用はほぼ一定であるが、Sの場合を見ると、これらのスピーチレベルも心的距離と関係することがあると思われる。

### 4-1 敬体と親体

まず、使用が談話日によって片寄ったスピーチレベル、すなわち初対面と2回目以降で使用が分かれた敬体と親体は、従来言われているように、親疎要因によるスピーチレベルシフトだと考えていいたろう。初日に少し親体が見られるのは、友人同士のKとM間の会話と、Sが顔見知りの会話収録者との間で交わした会話に現れたもので、ここでは例外である。顔見知りになった2回目以降で使用される親体は3人の対話者とも、接触回数が増えるにつれ増加しているが、接触回数が増すと共に親しさも増し、対話者間の心的距離が縮まっていくことのあらわれだと考えられる。5回目と6回目、親体の使用率が下がったことについては、我々は話題の性格によるものと考えている。5回目の「就職」という話題は3人の対話者いずれにとっても現実味がなく、一般的な話に終始した。談話中なんども話がとぎれ、沈黙が多く見られたのが印象的であった。それに対し6回目の「好みのタイプ」は決して話しにくい話題ではなかったが、後のフォローアップインタビューによると、対話相手達の恋愛には興味があるものの、自分の恋愛体験が暴露されてしまうことを恐れ、必ずしも気楽に話ができなかったということである。

今回明らかになった敬体と親体の使い分けは、前回(多田・犬飼・大浜 1996)の共通語と方言の使い分け現象と完全に重なり合い、これらが対話者間の親疎関係と心的距離によってシフトすることをさらに裏付けるものとなった。

### 4-2 ゼロ体と独白体

ゼロ体と独白体は3人の対話者いずれにも現れ、談話日による使用比率もS以外は大きく変わらない。これは一体何を意味するのだろうか。これらのスピーチレベルは、従来、我々の言う親体と共に「普通体」の中にひとまとめにされており、敬体からゼロ体や独白体にシフトしたものは、丁寧体から普通体へのシフトとみなされ、スピーチレベルシフトと考えられてきた。しかしこの資料を見る限り、常に一定量の使用があるゼロ体や独白体は、少なくとも親体や敬体のように親疎や心的距離という要素には影響されにくいスピーチレベルであると言わなければならない。話し言葉においては、相手の発話の一部をそのまま繰り返したり、あるいは文を中断したかに見せる「言いさし」などが見られる。それらは丁寧体とも普通体とも判断しにく

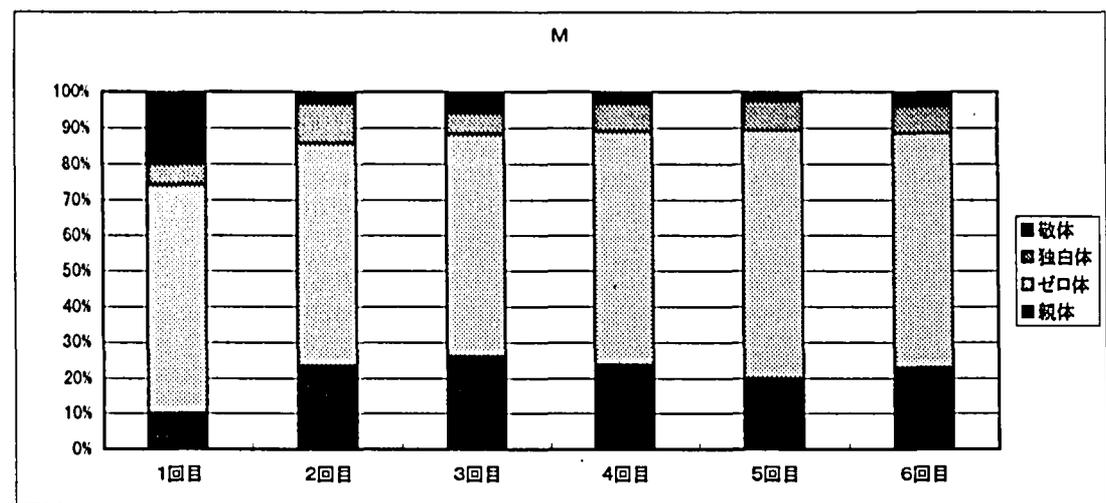
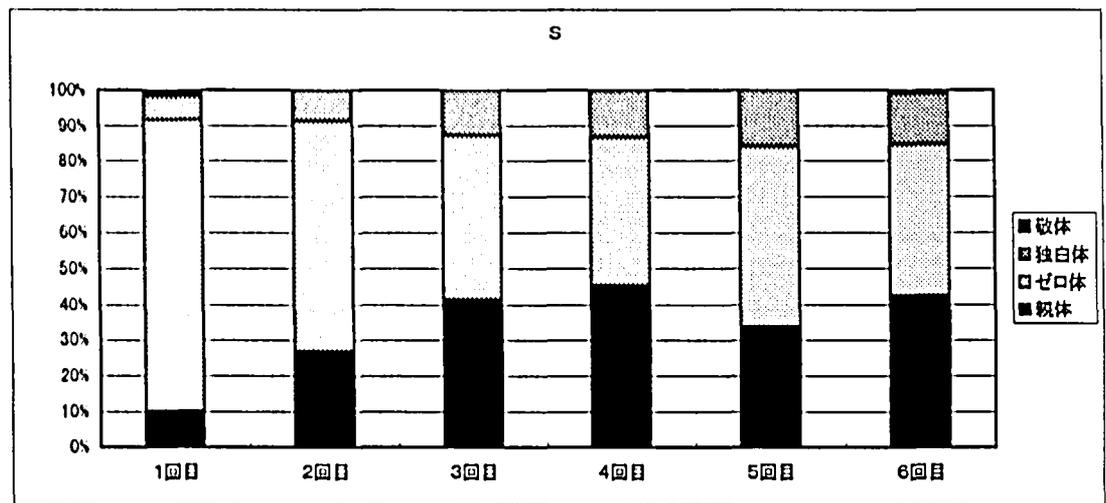
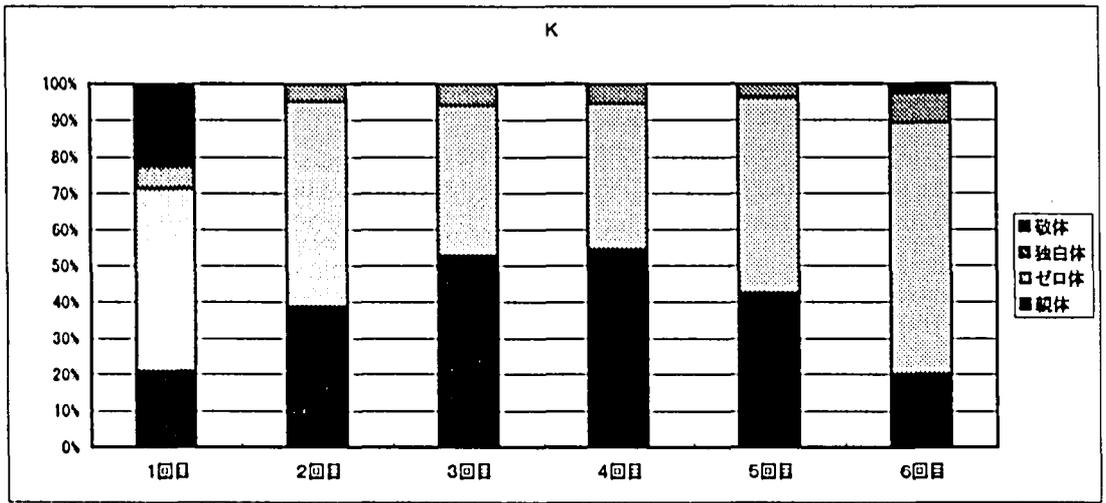


図1 個人別に見た談話日別の使用スピーチレベル比較

い。また丁寧体とも普通体とも共起しうる表現形態である。それらを考え合わせ、我々は普通体とはせず、別にゼロ体と独白体を設けたのだが、常時一定量現れるこのスピーチレベルは要因によってシフトするというよりは、日本語の話し言葉の基本的な特徴と考えるのが適当であろうと思われる。

ただSに関しては、そのスピーチレベルのシフトを観察すると、ゼロ体も独白体も心的距離に対応しているように見える。すなわち、ゼロ体について言えば、初回は2回目以降と比べ、使用が極端に多い。そして2回目以降徐々に減少し、親体の使用傾向が変更した5回目と6回目で、同様の変化が見られる。独白体もKとMはほぼ一定だが、Sでは徐々に増加している。ただ、このような傾向を示すのがSのみであることは注目すべきであろう。というのもSのみが敬体を全く使用していないのである。親疎あるいは心的距離は、敬体と親体の使い分けで調整するのが本来的であるが、その使い分けが何らかの理由でできない場合、例えば我々の資料ではSがK、Mより年上(=先輩)であることが大きいと思われるが、そんな場合に、その調整をゼロ体や独白体で代用することができるのではないだろうか。ゼロ体は敬体(「です、ます」など)や親体(「のだ、ね、よ」など)とは異なり、文末に相手への待遇度を明示するものをもたない形である。敬体の使用ができず、だからといって親体の使用もはばかられる場合に、待遇度に関して無標であることを利用して、対話相手との距離を保っていると思われる。初回のSのゼロ体による応答例には、初対面で緊張気味の様子が感じとれる。

(自己紹介をしているところ)

S: まあ、それはいいとして、一応学校教育の

K: あ、学校教育の方

S: で、美術教育

K: 美術? へえー

S: 広島出身

K: ~の方だと思った。広島はどこです?

S: 市内の中区の江波

:

(中略)

:

K: 江波と言えば、最近江波山桜、見に行かれました?

S: いや、まあ、昔はあっこの上に住んでた

K: あほんとに、あ、あそこにレストランありますよね

S: えっ

K: 頂上にフランス料理の店

S: あー、行ったことない

独白体については数が少なく、この資料だけでは断言できないが、相手目当て性を明示しない点ではゼロ体と似ているが、こちらはゼロ体とは異なり自分目当て性を明示している分、対話相手を無視する形である。そんな形をとっても相手が会話を続けてくれることをあてにできるとすれば、それだけの信頼関係が出来上がっているのだらう。そのように考えれば、独白体が目を追って増加し、心的距離との対応が見られると考えてもいいのかもかもしれない。

#### 4-3 スピーチレベルシフトと揺れ

多田・犬飼・大浜(1996)での共通語と方言の調査では、心的距離は直線的に縮まっていくのではなく、相互の心的距離を測り探るかのように方言使用頻度に揺れが見られた。そしてその揺れが次第に小さくなり、心的距離が安定したことをうかがわせたが、今回のスピーチレベルシフトに関しても同様の傾向が見られるかどうか、多田・犬飼・大浜(1996)にならって各談話を5分刻みに分割し、分析することとする。

KとMが、対話者間の親疎関係や心的距離を敬体と親体間のスピーチレベルシフトで表現したのに対し、敬体が使えにくかったと判断されるSは、常時一定量の使用があると思われるゼロ体と独白体を、親疎や心的距離の表現に代用したと考えた。先の共通語と方言の使い分け調査では、使い分けがある程度安定するまでは使用頻度に大きな揺れが見られたが、今回のスピーチレベルシフトにも同様の現象が見られるであろうか。

図2は、5分刻みで見たときの各スピーチレベルの使用頻度を時間軸に沿ってその移り変わりを示したものである。Mは他の2人に比べ発話量が極端に少なく、また発話もある時間に偏っているので、5分刻みの比較には適さないため、分析は、KとSのみに対して行った(図2参照)。

KとSそれぞれのスピーチレベルを比較すると、親疎や心的距離の調整に使用したと思われるスピーチレベルでは、他のスピーチレベルに比べ、使用の揺れが大きいことが観察されよう。すなわち、Sでは独白体とゼロ体が親疎や心的距離を測っていることを見た(4-2参照)が、そのスピーチレベルが敬体や親体より揺れ幅が大きい。同様にKでは親体と敬体(初回のみ)によって親疎と心的距離が測られているのを見たが、そのスピーチレベルに大きな揺れが見られる。Kのゼロ体の揺れは、全体を100%にした中で敬体と独白体に揺れがないため、親体の揺れと鏡像関係になっているものである。共通語と方言の使い分け同様、スピーチレベルシフトに関しても、より大きな揺れが親

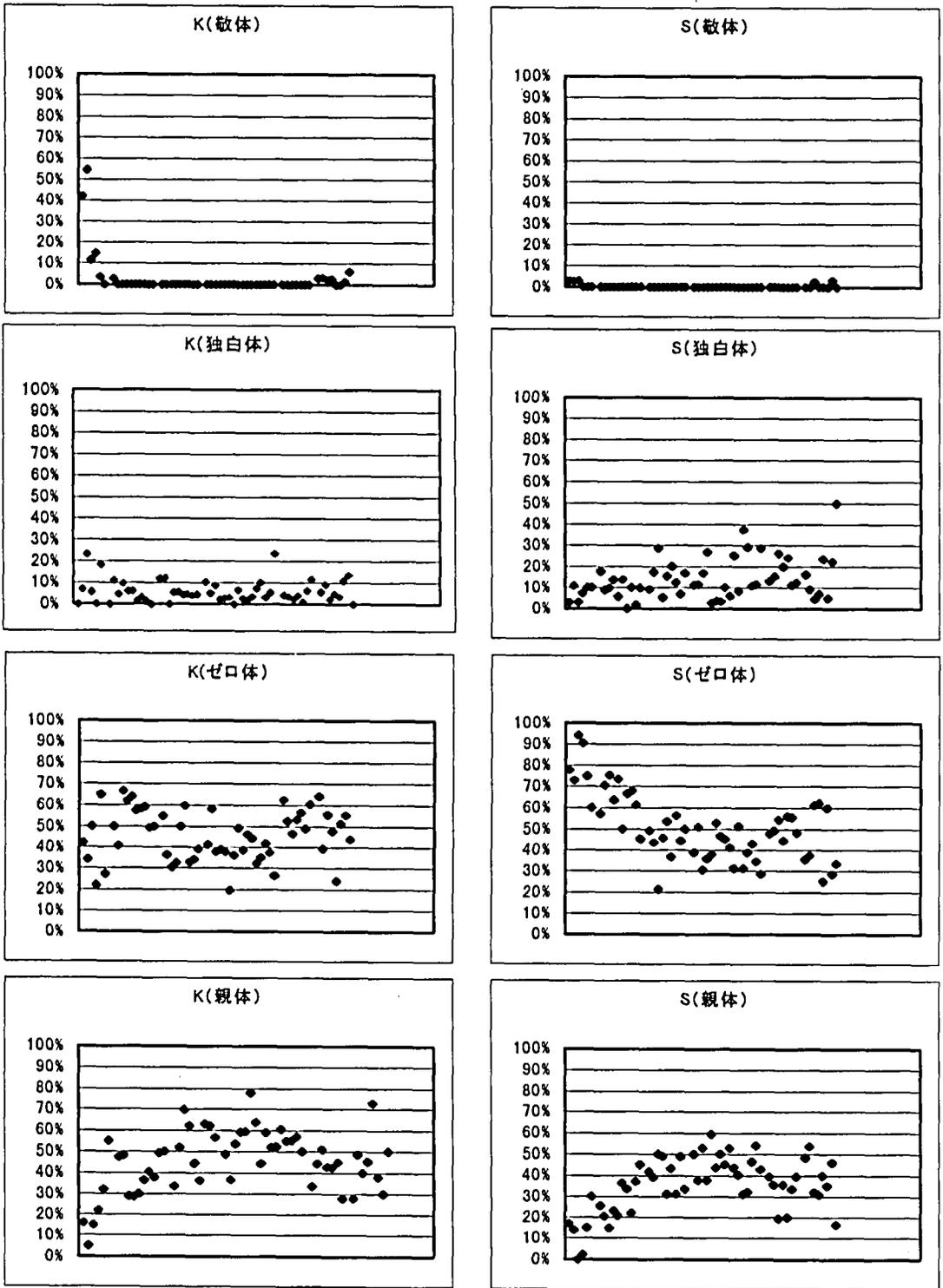


図2 個人別に見た各スピーチレベルの使用頻度の経緯  
 (ドット一つは談話開始から5分刻みでの各スピーチレベルの使用率を表す)

表2 専攻研究に見られるスピーチレベルシフトの談話機能比較

スピーチレベルシフトの談話機能	生田・井出	三牧	宇佐美
1) 前の発話への説明, 例証, 補足, 注釈	○	○	
2) 結論, 意志, 事実, 論点など重要部分の明示と強調	○	○	
3) 確認のための質疑応答, 中途終了型発話			○
4) 独話あるいは自問	○	○	○
5) 新話題への移行	○	○	○

察されたスピーチレベルが親疎や心的距離を調整しているスピーチレベルであることが示され, 心的距離をスピーチレベルで探り測る不安定な様子が見てとれる。

## 5 調査2の結果と考察

### 5-1 談話展開機能について

調査2では, 談話展開とスピーチレベルシフトの関係について見る。

インタビュー談話を分析し, スピーチレベルシフトが起こっている箇所に談話展開上重要な機能があることを指摘した生田・井出 (1983), 三牧 (1993), 宇佐美 (1995) によると, スピーチレベルシフトには次のような機能があるという。以下の5分類は筆者達による (表2参照)。

1から5は, いずれも談話の展開に関わる重要な機能ではあるが, 次のような問題点がある。

まず指摘しなければならないのは, 1, 2の機能をもつ発話であってもスピーチレベルシフトが見られない事例が容易に見つけられる, ということである。生田・井出 (1983) と三牧 (1993) にはそれぞれの機能に対応する例が挙げられているが, 談話全体の展開が視野に入れられていないので, スピーチレベルシフトがダイナミックに談話の展開構造に関わっていることが示されるというよりは, ただシフトが見られる度にその場限りの説明がなされているという印象をうける。また実際の談話では, 個々の発話の談話展開機能を確定することは非常に難しいという問題がある。

次に問題点となるのは3と4の談話機能である。これは先の2グループのものとは少し性質を異にし, 機能の特定が言語形式に負っていると思われるものである。「自問」「確認」「質疑」「応答」などは一見談話機能レベルの分類のように見えながら, 実は特定の言語形式のことを述べていると言える。すなわち, 確認のための質疑応答というのは, 具体的には直前の発話の一部を上昇イントネーションと共に繰り返すもの, またそれに同じ繰り返しで応答するものを指し, 中途終了発話は「から」や「けど」などの接続助詞で言

いさしをするもの, そして独話あるいは自問というのは文末に「かな, かしら」などを伴う発話のことをさしていると考えられるからである。

スピーチレベルシフトが, 敬語の使用不使用, 丁寧体普通体の別といういわば言語形式上の相違点を手がかりにし, それを談話機能と関連させる試みである限り, 機能の特定に言語形式を利用することは循環論であり, 決してスピーチレベルシフトと談話機能の対応を結論づけたことにはならないだろう。

以上, 1から4の談話機能にはそれぞれ問題があるので, 我々は, この5つの機能の中で比較的正しく取り出すことのできる新話題導入に限定して, その際にスピーチレベルシフトが起こっているかどうかを調査することにする。

新話題導入はD・ブレイクモア (1994) メイナード (1993), 杉戸・沢木 (1979) らを参考にし, 主に次の基準で選んだ。

- 1) 談話標識 (ところで, で, そう言えば, でも....つて, など) の使用
- 2) 主題の「は」の使用
- 3) 呼びかけ語を伴う発話
- 4) 語彙の意味的関連語, あるいは新語の導入

### 5-2 新話題導入とスピーチレベルシフト

新話題導入がスピーチレベルシフトによってマークされているとすれば, 新話題導入時のスピーチレベルは, その直前の同一発話者のスピーチレベルと異なったものであるはずである。表3は, 上述の基準に従い各談話から拾い出した新話題導入発話のスピーチレベルと同一発話者の直前のスピーチレベル (括弧内に示す) の組み合わせ別生起数を談話日ごとに示したものである。使用頻度の多かったスピーチレベルには網掛けをした (表3参照)。

新話題導入時と直前の同一発話者のスピーチレベルにシフトが見られた場合と見られなかった場合を比べ

表3 新話題導入時のスピーチレベル

	談話時間	敬(敬)	敬(セ)	敬(親)	独(独)	独(セ)	独(親)	ゼ(敬)	ゼ(セ)	ゼ(親)	親(親)	親(セ)	親(独)	合計
1回目	26分	1	6				1		6	2		2		18
2回目	47分	1	1		1	1			7	4		7	6	28
3回目	47分							1	10	4	1	11	4	31
4回目	77分				2	2	1	1	12	7	3	4	7	39
5回目	34分							1	8	5	1	4	1	20
6回目	36分			3				1	7	7		2	1	21
計		2	7	3	2	3	3	1	3	50	29	5	30	19

図3 新話題導入時のスピーチレベルシフトの有無比較

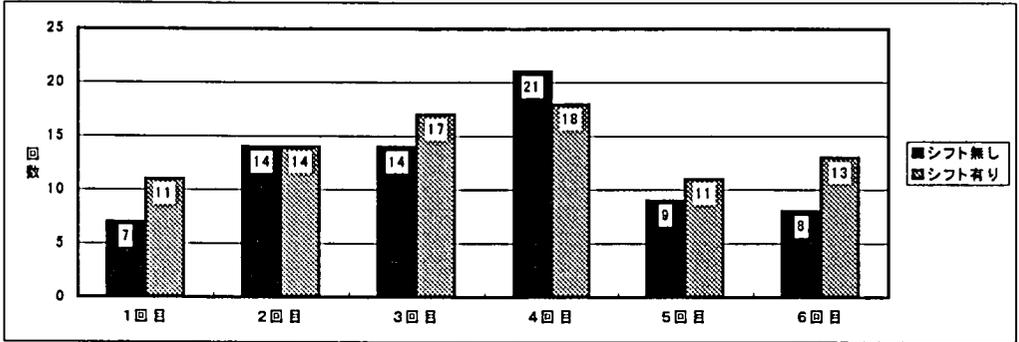
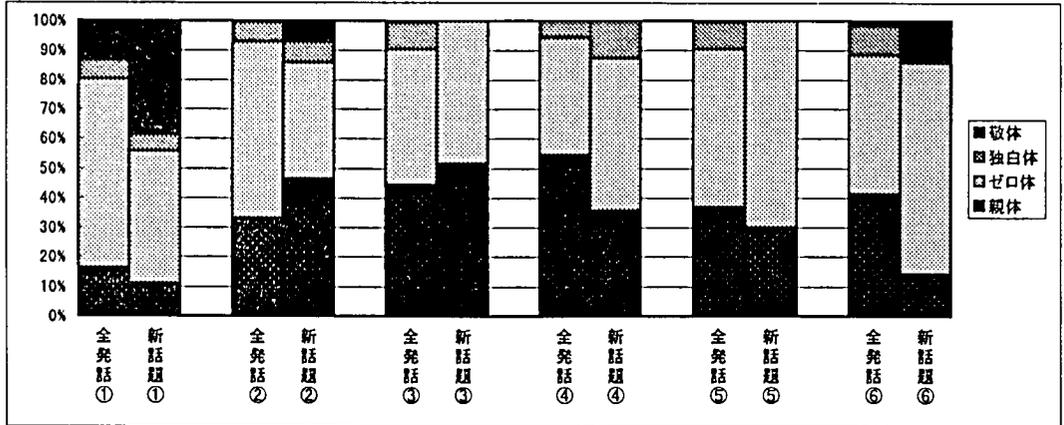


図4 談話全体と新話題導入時のスピーチレベル較



てみると、図3が明らかにするように両者はほぼ同数である。ここから少なくとも我々の談話資料においては、スピーチレベルシフトが新話題の導入をシグナルしているとは言えないという結果になった(図3参照)。

ところで表3を見ると、新話題導入時のスピーチレベルはさまざまあり、また談話日によって異なるスピーチレベルが使用される傾向にあることが分かる(網掛け部分参照)。談話日別に新話題導入時のスピーチレベルを整理し、これを調査1で示した談話日ごとのスピーチレベルに重ね合わせると、図4が示すように、それらがほぼ平行していることが分かるだろう(図4参照)。

すなわち、敬体と親体の使用分布も、常時一定量のゼロ体使用があることも、5回目と6回目の談話日に親体が減りその代わりにゼロ体が増えることも、調査1の結果と同じである。ここから、新話題導入時のスピーチレベルは当該の談話全体で採用されるスピーチレベルの傾向と異なるものではないということが分かる。言い換えれば、新話題導入という談話展開上重要な箇所でもとられるスピーチレベルがその他の箇所でもとられるスピーチレベルと同傾向であり、生田・井出

(1983), 三牧(1993), 宇佐美(1995)などで主張されるような談話機能とスピーチレベルシフトの対応関係は見られなかったと結論づけなければならない。

## 6 おわりに

確かに岡本(1997), 茂呂(1997)などでは談話機能とスピーチレベルシフトが対応しているように思われる談話例が分析されている。しかし、そのような例の多くはある制度内の談話である。教室、病院など、役割関係が認められる場面での談話である。その点では、今回分析対象とした資料は、特別な役割関係のない自由会話であり、そのような談話には談話機能とスピーチレベルシフトの関係は認められなかった。

これまでの先行研究ではこれと同様の自由会話資料に対して、スピーチレベルシフトを談話機能と関係づけ論じられるものが少なくないが(三牧1993, 宇佐美1995), それらはスピーチレベルの設定や談話機能の同定に問題があり、その問題性が見せた結論ではなかっただろうか。本研究で明らかになったことは、自由会話内に見られるスピーチレベルシフトは、談話機能によるものではなく、むしろ、対話者間の心的距離に対応するものであるということである。

自由会話に限定した結論ではあるが、スピーチレベルシフトという現象は、人間関係を構築していく過程を映し出したものと言える。言い換えれば、対話者間の人間関係が決定され、固定していく過程で、いまだ不安定な関係にある対話者が互いに心的距離を測りながら探る様子が現れたものであるとすることができるであろう。

## 参考文献

- 1) 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12巻12号 77-84.
- 2) 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用 —スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662 昭和女子大学近代文化研究所 27-42.
- 3) カノックワン (1996) 「「カナ」「カシラ」に関する考察」『日本語と日本文学』第23号 1-12.
- 4) 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16巻3号 39-51.
- 5) 杉戸清樹・沢木幹栄 (1979) 「言語行動の記述—買い物行動における話しことばの諸側面—」南不二男編『言語と行動』大修館書店 273-319.
- 6) 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版 45-76.
- 7) 多田美有紀・犬飼康弘・大浜るい子 (1996) 「方言とコードスイッチング(1)—時間による推移を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』501-509.
- 8) 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるための文接辞—」『日本語学』第6巻 第10号 93-109.
- 9) 仁田義男 (1991) 「言表態度の要素としての<丁寧さ>」『日本語学』10巻2号 65-75.
- 10) 野田春美 (1997) 「「の(だ)」の機能」くろしお出版
- 11) 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要第一部門 人文科学』第42巻第1号 39-51.
- 12) メイナード・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 13) 茂呂雄二 (1997) 「教室談話のジャンル」『対話と知』茂呂雄二編 新曜社 47-75.
- 14) Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Basil Blackwell 武内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房